

山根一仁さん(バイオリン)応援レポート

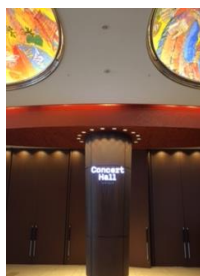
フィルハーモニックアンサンブル管弦楽団第62回演奏会

2017年4月30日(日)14:00開演

東京芸術劇場

フィルハーモニックアンサンブル管弦楽団との1年半ぶり2度目の共演！

- ◆ 指揮: 矢崎彦太郎
独奏: 山根一仁
コンサートマスター: 永峰高志
- ◆ プログラム
ドビュッシー: 牧神の午後への前奏曲
ハチャトリアン: バイオリン協奏曲ニ短調
ムソグルスキー: 組曲「展覧会の絵」
- ◆ 山根さんのアンコール曲
バルトーク: 無伴奏バイオリンソナタ 第2楽章



The 62nd Concert of
Philharmonic
Ensemble
Orchestra
フィルハーモニックアンサンブル管弦楽団 第62回演奏会

2017 4/30(日) Sun
東京芸術劇場
Tokyo Metropolitan Theatre

開演 13:00 開演 14:00
S席 ¥3,000 A席 ¥2,500
本館至児童館小ホールまで徒歩約15分
No preschool children admitted

指揮
矢崎 彦太郎
Hidetaro Yasaki (conductor)

ヴァイオリン
山根 一仁
Kazuhito Yamane (violin)

管弦楽
フィルハーモニックアンサンブル管弦楽団
コンサートマスター
永峰 高志
Takashi Nagatsuma (concertmaster)

ドビュッシー / 牧神の午後への前奏曲
Debussy / Prélude à l'après-midi d'un faune

ハチャトリアン / バイオリン協奏曲
Khachaturian / Violin Concerto

ムソグルスキー / 組曲「展覧会の絵」(ラヴェル編曲版)
Mussorgsky / Pictures at an Exhibition suite (Orchestrated by Ravel)

豆知識

アラム・イリイチ・ハチャトゥリアン (1903年5月24日 - 1978年5月1日)

旧ロシア帝国領グルジア(現ジョージア)で、アルメニア人の貧しい製本業者の子として生まれる。

商業専門学校で学んだ後、18歳でモスクワに出た彼は、モスクワ大学の生物学科に入学。

在学中にクラシックに接し、音楽家になりたいという情熱にかられ、

楽譜も読めなかったにもかかわらず19歳の時、グネーシン音楽学校に入学。

初めチェロを、後に作曲の手ほどきを受けた。1929年に卒業すると、次に

モスクワ音楽院に入り、グネーシンとミャスコフスキーに作曲を師事。

1940年、37歳の時、彼の名を世界的なものにした「バイオリン協奏曲」が書かれ、スターリン賞を受賞。

1941年、劇音楽「仮面舞踏会」が劇音楽として作曲、初演された。

1942年、39歳の時、バレエ「ガヤネー(ガイヌ)」が上演され、この中の「剣の舞」が爆発的なヒットを収め、2度目のスターリン賞を受賞。

1944年、「仮面舞踏会」のうち5曲を選び管弦楽のための「組曲」に再編成した。

(クラシック作曲家ファイル by Katsuma Nakajima, DOREMIより抜粋)



1曲目は、フィルハーモニックアンサンブル管弦楽団によるドビュッシーの「牧神の午後への前奏曲」。美しい、流れるような曲。フランス印象派の作曲家ドビュッシーの出世作。「夏の昼下がりに、好色な牧神が昼寝のまどろみの中で官能的な夢に耽る」という内容。



2曲目に山根さんが登場。赤い大きめの布をひらりと広げ、バイオリンの顎当てに載せる姿は一瞬、闘牛士の姿と重なった。そして楽団による9小節の序奏の後の山根さんのソロは、打って変わって早いテンポの激しい旋律で始まった。中央アジアの荒涼とした高原を馬が駆け抜ける情景が眼に浮かんだ。

ハチャトリアン。あの有名な誰もが聞いたことのある「剣の舞」や「仮面舞踏会」の作曲者。(1903-1978) 割と新しい近現代の作曲者だ。帝政ロシアの支配下にあったグルジアで、アルメニア人の家庭に生まれる。1918年、グルジアがロシアからの独立を宣言するが、1921年、再びソビエト連邦に首都を奪還され、ソビエト連邦の支配下となった。

こういう過酷な歴史を生きたハチャトリアンの曲は、故郷を想い、物悲しく、哀愁に満ちている。山根さんの演奏は、それを表現し、聴衆に伝えている。ハチャトリアンの生誕地、生きた時代、歴史が、根底に流れている。



協奏曲は、ソリストとオーケストラの絡み合いが面白い。一方が話しかけ、もう一方がそれに応える。一緒に盛り上がったたり、落ち着いたり。どちらか一方が際立ちすぎてもいけないし、消えてもいけない。山根さんの演奏は、オーケストラとの一体感があり、お互いの信頼感を感じた。

曲の中に、ホルン、クラリネット、オーボエ、ファゴット、ハープ、シンバル等のソロが入り、それぞれの音色を楽しめる。中央アジアの高原を駆ける馬と、それを取り巻く川の流れ、風、雷、鳥を想像した。



(演奏中の写真はすべてフィルハーモニックアンサンブル管弦楽団さんのご提供)

山根さんの右手は弓を自由自在に操り、左手の指は目にも止まらぬ速さで弦の上を縦横無尽に動く。バイオリンが体の一部になったかのような。時には足を開き、膝を曲げ、上を見上げ、まるでハチャトリアンが乗り移ったかのような。

40分に及ぶ山根さんの演奏は、聴衆を引き付け続け、心を揺さぶる強い力があつた。

Q&A

後日、山根さんに伺ったところ、とても興味深い回答が返ってきました！

Q1. 山根さんはいつも、一番大事にしているのは楽しむこと、とおっしゃっていますが、今日は楽しめましたか？

A. とても楽しむことができました。本番を楽しむためには良い練習を積み重ねることが僕にとっては一番大切なことです。心身ともにとても良い状態で臨めました。

Q2. バイオリンの演奏には、ソロや室内楽や協奏曲いろいろな型がありますが、今日のように協奏曲の場合は演奏にどんな違いがありますか？

A. シンプルに、オーケストラと演奏するときにはいつもより体力を使うと思います。たくさんの楽器、たくさんの演奏家と共に演奏するわけですから。体力以外はそこまで違いはないと思います。室内楽の延長線上にあるのがオーケストラですから。これは理想論ですが。

Q3. ハチャトリアンは近現代の作曲家、そしてロシアというより中央アジア生まれの作曲家ですが、そういったハチャトリアンの曲を弾かれるのはどういった楽しさ、難しさがありましたか？

A. 今回演奏したハチャトリアンの協奏曲はとてもエネルギーで民族色に溢れる曲です。アルメニアのダンスや風景を知ってないといけない。僕は残念ながらダンスも踊れないし風景を実際に見たことはないですが、最大限情報を集めて演奏に臨みました。この曲は15歳の時から弾いておりとても身体にフィットしていて、難しさよりも楽しさが勝っています。

Q4. ハチャトリアンの曲は、技巧派の部分が多いと思いますが、練習は大変でしたか？

A. 練習は楽しかったです。以前弾いたことある曲全般に言えることですが、変えようと思っていなくても以前の自分と大きくアプローチが変わってるのを見つけると本当に嬉しくなります。それがとても面白いです。

Q5. 今回のコンサートを経て、何か新しい発見がありましたか？ 自分の中で変わったものはありましたか？

A. ヨーロッパに住み始めて様々なことが変化し始めています。自分が進化して行く最中にこのように演奏会をさせていただけるのはとてもありがたい事です。演奏会から得られる経験値は何よりも大きいので。自分の信じる最高の音楽を常に追い求めていきたいです。

山根さんは本番を楽しむだけではなく、練習の段階から演奏を楽しんでいることが伝わってきます。また、進化中の自分を楽しんでいるという言葉が印象的。練習や演奏会を重ね、環境の異なるヨーロッパで暮らすことによって、新しい経験を積み、大きく進化していく。そんな自分を見つけると嬉しくなり、面白いという山根さん。日々の出来事、経験を楽しめる強さ、常に前向きな姿勢。これが山根さんの可能性を広げている。

これからどういうふうに変化し、どういう方向に羽ばたいていくのか、見届けたい。応援する側もわくわくしてくる。



中学3年生でコンクール優勝、、、という輝かしい経歴を聞くと、きっと家系には著名な音楽家がたくさんいらっしゃる音楽家系なのだろうとか、小さい時からスパルタ式の厳しいレッスンをこなしてきた音楽漬けの子供時代だったんだらう、と勝手に思い込んでいた。

ところがお母様にお話を伺ったところ、家系には音楽家はいない。また小さい頃もずっと外遊びが好きでな子だったとのこと。そういう一見普通の家系の、普通の子供時代を過ごした青年が、これ程の演奏家になれるとは想像できない。どこに秘密があるのか。その答えを見つけないという好奇心が湧いた。

その答えはもしかしたら、前ページの山根さんのQ&Aの中にあるのかもしれない。「すべてを楽しむこと。」これがキーワードなのかもしれない。また、山根さんの感受性や表現力の種は、外を遊び回っていた幼少時にあったのかもしれない。答えを見つけるべく、山根さんの演奏をもっと聴きたい。



フィルハーモニックアンサンブル管弦楽団

PEO

1968年、ソ契大学交響楽団OBにより、合奏団の装束に応じるおたけで「メサイア」(ヘンデル)の演奏コンサートとして結成。1970年に初の主催演奏会を開くにあたり、次々「門」をひらき、一般の社会人オーケストラとして市民を広くに自主演奏活動をおこなう。

そのほか、従来の一冊との差を少なくするために、書名を50音で表すというホルを求め、不規則な東家のあなず、国内外の名ホルを流れる前著流行なども全面に、生地域との交感にもなっている。また、第一巻の注釈や索引等に述べられているように、ツァーティス（ツァーティス）をリトアニア語と見て読めるが、すでにこの雑誌が「ツァーティス」のレベルに上りたことを示している。

「第2回JISコンサートツアー」では、フジテレビの他、ニューオータニ・京王・ホールで公演。数編田
沼氏の「日本の古典」を題材にした作品を海外に紹介し、日本を代表するジャズピアニスト山下洋輔氏
共演の「フジテレビ・ジャズ・コンサート」と共に演奏があげらる。

1988年、リットン西友協会会人ロードで日本をモダ・フにしか動な女を紹介する。2000年、北京「紅朝劇院」にて、長崎のソノバト変者「安部三郎作品の日」日演劇を招待の大女主人民と結ぶ。
2002年6月には、リットンソノバト変者「ロードで、二枝成影作『おんなのこころ』大舞台（ボーイング）
ソノバト変者（ロード）大女主人民と結ぶ海外公演、リットンソノバト変者（ロード）大女主人民と結ぶ海外公演。

①大公演では、メロ・シリアノのニル・オブラスツォ、徳永良一、徳永一男、長島道（プラ・ムネ子、三浦幸白）、シリアノの山下洋輔、花岡てゐ、トランペットのコンジデナン・グレート（元ベルリンフィル首席）、ヴァイオリンの大木誠子、千住みち子、ボカルの新井清志などの健闘と共演し、大成功を収めた。

2004年3月、レズンカウツァの作品のウェブページ「ホーム」をトヨタミュージアムコンサートの一環として「本と演」が運営保管・換装される。

1967年7月、特別一級船客で第5回ロサンゼルス博覧会来賓。ハンガリー・ブダペストにてベト・ヴァン・ラン、オーギュスト・ロランと出逢。『他所に逢ふ』の題材となる。

2009年4月、オランダ/阿姆斯特ダム・コンセルトヘボウ・ザマー・コンサートに招待され、小林明一郎指揮（指揮: Martina Pless, Holten (saxen)）でマーラー1復元（文藝春秋第2巻）を演奏。満席の聴衆からスタンディング・オベーションを受ける。

2012年11月、三枝成彰市長の夫木本男声合田川楽楽に同行し、イタリヤ/ミナノ大型船にて、三枝成彰
作中「クオ・ヴリス」を演奏。

は、音楽のライヴCDとして、マナーに復話（交響曲第2番）、同/交響曲第8番、エリサ・オブラストワ
と共に、ロシアの「オブラストワ」(n.大谷正子)、「シムスター・ピッチ」(交響曲第4番「命」)、ミムス
ター・コルネリウ「シムスター」(n.大谷正子)とリリース。

[illegible]

《今後の予定》

● 邦 ノアッシュ生誕 20 周年記念コンサート、2017 年 11 月 12 日(日) 14:00 ハッポウまほしホール
指揮 矢野龍太郎 独奏(左)波島 吉信(ハープ奏楽奏指揮)
メロビーゴ/交響詩「ローマの陥落」
メンデルスゾーン/ヴァイオリン協奏曲
ヘンデル/ソナタ C 大調 メヌエットより抜粋

■第63回演奏会 2018年2月9日(月・祝)サントリーホール
指揮:小林研一郎
ベートーヴェン/交響曲第7番
ムソルグスキー/春の祭典

指揮

CONDUCTOR

矢崎 彦太郎

Hikotaro Yazaki



1947年東京生まれ。日本経済大学経済学部、政治学専攻を卒業。同大学から東京理科大学経済学部へ入学。専攻は、政治経済学。主として、政治経済学を専攻。主として、政治経済学を専攻。

トモシロの指輪を贈り出した小倉和賀の娘を嫁めた後、東京へ「ス・シ・シ・ジョー・オー・オー」クラブのメイン娘の旅行に同行、公演後、クラブの女流を嫁りぬめたのだ。ス・シ・シ・ジョー・オー・オーのクラブ女流は、

「アフリカ」に限らず、世界中の文化に人々が魅かれ、1974年に「シニアアフリカ」展を開催したことに由来する。1980年代後半から、日本ではアフリカ展が相次ぎ開催され、1990年代には「アフリカ文化の日」が設けられ、アフリカ文化の国際化が図られた。日本では、アフリカ文化の国際化が図られ、アフリカ文化の国際化が図られた。

[illegible]

2000年フランス政府より「河文化勲章」シュブール
エを、2003年には「国オアシス勲章」を受賞。200
2年にはタフナービル音楽祭奨励賞を受賞。
現在在

合奏指導・副指揮者

ASSISTANT CONDUCTORS

蛇澤 亮、井戸田 善之、鈴木 恵里奈、山本 真

(当日のパンフレットより)